



あんこう

第18号

平成 29 年 3 月発行

「あんこう」は、オオサンショウウオの当地方の呼び名です

巻 頭 言

活動報告

生野高校で実施した出前授業	_____	1
	副理事長 岡田 純	

オオサンショウウオあれこれ

ハンザキバイブル	_____	3
	理 事 田口 勇輝	
ダイビングスポットとしての長良川	_____	10
	会 員 下村 俊孝	

ハンザキ研あれこれ

これは使える!! T.T式捕チュウ器とハン研のネズミ標本	_____	13
	会 員 清水 善吉	
同窓会	_____	15
	理事長 栃本 武良	

生き物レポート

沖縄カエル旅行記	_____	17
	会 員 松田 裕太	

生き物あれこれ

ムササビの話	_____	19
	麻布大大学院生 手塚 海香	
ヤマビルについて	_____	21
	会 員 小林 弘幸	

随想

ハンザキ研究所と出会った日	_____	22
	会 員 松木 祥平	
ピーマン栽培について	_____	23
	会 員 竹村 正典	
三途の川の地獄の淵でハンザキ調査	_____	24
	理事長 栃本 武良	

イベント報告

28年度後半のイベント	_____	26
	事務局長 奥藤 修	

巻 頭 言

今年の1月のドカ雪にはまいりました。14日朝の積雪50cm、国道からハンザキ橋を渡って郵便受けまでの30mは配達の方のことを考えると雪かきをしておかねばなりません。橋の上がほとんどですから川の中に落とせばいいのですが、それでもなかなかの重労働です。翌朝にはその上に80cmの雪があり悲鳴を上げながらの雪かきになります。プールなど見回りの範囲はラッセルでごまかしますが、それでも80cmになると膝でかき分けねばなりません。16日の朝には40cm、そしてまた雪かきとラッセル、17日は30cmあり、4日間で2m分の降雪があったことになります。こんな一度の大雪はハンザキ研始まって以来のことでした。数年前に1~2月の間毎日雪が降って、積雪1mを維持したこともありましたが、今回の集中豪雪（もっと雪深い地に暮らしている方には大したことはないのかもしれませんが）のような降り方は13年目で初めてのことでした。

昨年多くのボランティアの方に防鳥ネットを完成していただいたのですが、金網の上に積もった雪が凍り付き、さらにその上に降り積もっては凍結していきます。足場用の鉄パイプでがっちり組み立ててもらったのですが日を追って金網が重さで垂れてきました。

17日から姫路の自宅へ戻っている間に倒壊したという連絡が入りました。まさかと思ったのですが、雪氷の重さはすごいものです。あの鉄管が折れ曲がって全壊していたのです。それから4か月、パイプ外しと金網の撤去と復旧に取り組んできました。自然の力の一端を思い知らされた気がしました。それにしても多くのボランティアの皆様には感謝するのみです。

前号で75歳をめどに終活をする考えを表明しましたが、今年6月の総会で2年の任期が終わりますので、若い岡田副理事長にバトンを渡します。NPOは雨後の筍のように次々設立されますが、後継者不足と資金難で消えていくのだそうです。後継者については役員事務局員ともども10年歳を取りました。ハンザキ研としてもこれからが正念場かと思えます。私もバトンを渡したからと言って山を下りる考えは全くありません。何しろ天国のような当地を離れる気になりませんし、これからも新しい理事長の背中を押すべく頑張っていきたいと考えています。

幸いなことに朝来市では市域の河川のハンザキの現状把握事業を予算化して今年度で5年になります。このような事例は全国の自治体にもない画期的なことだと思います。市長さんをはじめとして多くの市民の方々の応援があつてのことと感謝しております。兵庫県はコウノトリだけでなく同じ国の特別天然記念物であるオオサンショウウオに配慮した河川工事を実施しています。陸のシンボルとしてのコウノトリ、水中のシンボルがオオサンショウウオという2種の存在は兵庫県の環境の豊かさを示すことにつながるでしょう。これからも多くの方々のバックアップをお願いしたいと思います。

平成29年3月

NPO法人 日本ハンザキ研究所
理事長 栃本 武良

活動報告

生野高校で実施した出前授業

副理事長 岡田 純

栃本先生から「岡田さん、生野高校へオオサンショウウオの授業に行かない？」との話があり、喜んでお引き受けした。というのも生野高校（兵庫県立生野高等学校）のすぐ横を流れる市川（図1）にはオオサンショウウオの生息情報があり、以前から川に入りたいと思っていたからである。近年、そこに遊歩道整備等に伴う保全対策でオオサンショウウオの人工巣穴が兵庫県養父土木事務所により設置（1基は既設、3基が建設中）され、実際に人工巣穴を隠れ家として利用するのが確認されたそうである（栃本武良・奥藤修，私信）。また、生野高校から約3~4 km上流の朝来市生野町の生野ダム下流域では、河川改修に伴う調査で約200個体のオオサンショウウオが標識されている他（栃本武良，私信）、残飯に群がる餌付けされたオオサンショウウオが報告されている（栃本，2004）。このように生野町内の市川水系には相当数のオオサンショウウオが生息しているとみられるが、標識個体の追跡調査がされておらず、また、生野高校付近での生息調査もほとんど行われていない。生野高校での授業をきっかけに生野町市街地も含めた生息調査を進め、高校生にオオサンショウウオへの関心を少しでも持ってもらえればという気持ちでいた。

早速、授業（生物）の担当教諭である本木敦士先生と連絡を取り、今回の授業のねらいはオオサンショウウオを通して地元生野町の生物について知識を深めると共に生態系の保全について考えること、また、生野町以外の地域から通う生徒の中にはオオサンショウウオについて知らない生徒もいるため、その生態やハンザキ研究所の活動について知ってほしいということをつらねた。授業は1年生2クラス（各40名）が対象で2017年3月16~17日に各クラス計2時限（50分 x 2）を使い授業をすることになった。

折角の機会なので、講義（座学）だけでなく川に行き実際にオオサンショウウオの調査（一緒に全長や体重を測り、標識する）をすることを提案し、本木先生の同意を得た。保全教育の一環ということで朝来市教育委員会には授業内容について快諾してもらった。

授業をした時に驚いたのは、学校横の川でオオサンショウウオを見たことがある生徒が少なくなかったこと、そして地元生野町出身者の中にはハンザキ研でオオサンショウウオの勉強したことがあるという生徒もいたことである。そのせいか、思った以上に授業での反応がよく、こちらの問いかけに積極的に答えてくれた。オオサンショウウオの生活史、保全の現状、ハンザキ研の調査や地元の取り組みについて紹介し、オオサンショウウオグッズの製造販売などを手がける「いくの銀谷工房」から「いくのんグッズ」（いくのんは、生野高校オリジナルのゆるキャラ）はとても人気があるので（図2）、新しい商品のアイデアを生徒さんにぜひ考えて欲しいと提案があったことも伝えた。また、「いくの銀谷工房」特製のあんこう紅茶クッキー（オオサンショウウオクッキー）も食べてもらった。野外授業では、皆で川へ入って探すのは時間的にも人数的にも無理なので、前日、川にカニかごを設置し（図3）、私と本木先生が川に入っただごを回収、捕獲されたオオサンショウウオの測定を生徒たちに手伝ってもらうことにした。幸いなことに初日3個体、2日目2個体の計5個体のオオサンショウウオ（いずれも新規個体で全長63.0~93.8 cm）を捕獲できた。本木先生はかなり興奮気味で、河川改修で最近姿が見えなくなって心配していたので嬉しかったとのこと。生徒たちはおっかなびっくりながらも測定を手伝ってくれ、「かわいい」、「キモい〜」など反応は様々（図4~6）。おそらくカエルも触ったことがない子がほとんどではないだろうか。今回の授業でオオサンショウウオに触れ、生野高校のすぐそばにオオサンショウウオが生息している

こと、ここにはそれを育む環境が残っていること、そしてオオサンショウウオの持つ不思議な魅力を実感してもらえたのではないかと思います。夏には同じ場所で生息調査、人工巣穴の利用状況を調べる予定なので、本木先生に声をかけて生野高校と一緒に調査や保全活動を進めていければと考えています。

末筆ながら、今回の授業を実施するに当たり、ご指導、ご協力を賜った生野高校の本木敦士先生ならびに関係者の皆様、朝来市教育委員会文化財課の田畑課長、いくの銀谷工場の斎藤さん、ハンザキ研の栃本武良理事長、奥藤修事務局長、以上の方々に心より御礼申し上げます。

引用文献

栃本武良（2004）オオサンショウウオの研究 XI 摂餌生態 2. 兵庫生物 12(2): 261-265.



図 1 生野高校横を流れる市川



図 3 カニかごを設置する本木敦士先生



図 4 タモ網に入れ体重を量る準備



図 5 初めて触るオオサンショウウオの腹



図 2 「いくのん」のポーチ



図 6 生野高校の生徒たちとオオサンショウウオ

オオサンショウウオあれこれ

ハンザキバイブル

理事 田口勇輝

ハンザキを志すにあたりバイブルとして常に手元に置き、その内容をいつでも引くことができるようにしておくべき 3 つの本がある。まずは『日本ハンザキ集覧(生駒義博編 1973)』(図 1)、次に『大山椒魚(小原二郎 1985)』(図 2)、そして 3 つ目に『オオサンショウウオに優しく』・『オオサンショウウオに優しく II』(図 3)だ。日本ハンザキ研究所の会員で、3 つ目の本の著者を知らない方は“もぐり”だと言われても仕方ないかもしれない。これは栃本先生の業績集であり、40 年間の研究の成果が整理収集されている大著である。この小文の主題は 3 つ目のハンザキバイブルにあるが、そこに進む前に『日本ハンザキ集覧』と『大山椒魚』についても記述しておく。

『日本ハンザキ集覧』は、生駒義博氏が編集し、ハンザキの古典および近代の文献を数多く収録している。岡山県津山市にある津山科学教育博物館の 10 周年を記念して出版された。表紙を開いてまず目に入るオオサンショウウオの写生図はシーボルトが江戸時代に日本から持ち帰ったもので、強烈なインパクトをもっている。がっしりとした体躯を S 字にくねらせ両生類界の王者を彷彿させるその絵は、いちど目にするとうれいと感じ、誰かが忘れることのできない存在感を放っていると感じる。散逸してしまい、手にとることができなかったかもしれない多くの資料が、こうやって本にまとめられているのは幸運というほかない。本書は 3 部構成となっており、①古典(本草書)の部に 11 編、②古典(学術書)の部に 7 編、③近代学術書の部に 16 編の合計 34 編が収められている(表 1)。古典の部は基本的には漢文だが、返り点や送り仮名がついている。中国の文献の影響を受けていると考えられ、鯢魚と表記して「サンセウウオ」と仮名がふられていたりする。チュウゴクオオサンショウウオ

を示す「大鯢(ターニー)」から「サンショウウオ」の当て字として用いたものだろうか。また、同様にチュウゴクオオサンショウウオを示す「娃娃魚(ワーワーユー)」の表記も見られる。古典の部で最も古い文献は、延喜 18 年(西暦 918 年)の「本草和名」にまでさかのぼることができ、日本人がどのようにハンザキを捉えてきたかを知るための貴重な手掛りともなる。古典(学術書)の部では、シーボルトの『FAUNA JAPONICA』に始まり、日本人で初めてハンザキの論文を書かれた、東京帝国大学の佐々木忠次郎氏や、岡山県の湯原で精力的にハンザキの観察をされた石川千代松博士の報告が掲載されている。これらは 100 年以上も前の記述だが、ハンザキの生息環境や行動を知るうえで多くの示唆に富んでいる。また、大沢岳太郎博士のハンザキ解剖図 45 枚の精緻なデッサン図と 206 頁におよぶ本文(ドイツ語)が収録されている。近代学術書の部では、1930 年に岡山県がまとめた『はんざき或いは大山椒魚』に始まり、有名な田子勝弥氏の『蝶鰻と山椒魚』や、佐藤 井岐雄氏の『ハンザキ(日本有尾類総説)』、岩間春夫氏の『ハンザキの発生段階図』などが含まれている。また、最後に掲載されている生駒義博氏の『日本ハンザキ雑記』では昭和 48 年(1973 年)9 月 28 日の朝日新聞の記事が載っており、「嘆きの中国産オオサンショウウオ」という表題でチュウゴクオオサンショウウオが輸入され岡山の養殖池で飼育されていたことを確認することができる。

なお、ハンザキの古典については、神戸市立須磨海浜水族園で飼育教育部社会教育課の和食萌さんが同水族館の会誌「うみとすいぞく 31(3)」に『オオサンショウウオの絵に見る江戸時代の研究者たちの視点』をまとめられていて興味深いので別途補足しておく。1666 年から 1876 年における 7 枚の博物画が掲載され、当時の学者が博物学的にどのようにハンザキを観察し、捉えていたかを考察されていて面白い。

次に、本誌「あんこう」でも何度か紹介させていただいたが、広島市安佐動物公園の初代園長、小原二郎博士が書かれた『大山椒魚』は、発行から 30 年以上たった今でも学ぶべき内容が詰まった一冊である。随所に小原先生の緻密なお人柄が反映されていて、シーボルトが日本に来てハンザキを持ち帰る内容なども様々な資料を調べられ、丹念にその足跡を辿られた様子が伝わってくる。ハンザキに関して“あらゆる情報を集め、それを正しく理解した上で、一般の人びとにも還元しようと思った”と本文にあるように、「第 3 章：生息地」から「第 4 章：野外生態」、「第 5 章：繁殖行動」、「第 6 章：飼育する」では、動物園のオオサンショウウオチームが野外調査や飼育を通じて可能な限りの生態を解明するために奔走し、それらをひとつひとつ明らかにしていった内容が理解できる（表 2）。とりわけ、野生下および飼育下で繁殖行動をつぶさに観察してその生態を明らかにした内容が特筆されるだろう。また同園で副園長をされ、現在は日本オオサンショウウオの会の会長をされている桑原一司博士は産卵行動の詳細を解析された（桑原・中越 2009）。なお、2016 年 12 月 3 日に琵琶湖博物館で開催された「古橋のオオサンショウウオ 生態と保全シンポジウム」に参加したとき、講演をされていた京都大学名誉教授の松井正文博士が『大山椒魚』を紹介され、次のようなことをおっしゃっていた。「現代のオオサンショウウオについての知見は、

表 2. 『大山椒魚(小原二郎1985)』の目次

	タイトル	頁
序章	出会い	8-12
第 1 章	これまでの研究	13-41
第 2 章	その素顔	42-75
第 3 章	生息地	76-96
第 4 章	野外生態	97-126
第 5 章	繁殖行動	127-167
第 6 章	飼育する	168-224
終章	天然記念物の行方	225-235

ほとんどこの本から進んでいない」。そんなこともないだろうと反論したくもなるが、それほどハンザキの生態がよくまとめられているということである。そして、まだまだ解明すべきことがたくさんあるなかでもっと頑張れという松井先生の叱咤激励として捉えるべきなのだろうと思う。なお、本書を読むと小原先生がもたれていた緻密さだけでなく、こんこんと沸き出でるハンザキへの情熱も垣間見られ、次の文がそれを物語っている。“これまでに知られている生態学的事実は大へんに少なく、文献を読み返すたびにこの研究の意義を感じ、体が熱くなるような興奮をおぼえることもしばしばあった”。ハンザキは、その強烈なカリスマ性ゆえにシーボルトをはじめ多くの著名な学者を魅了してきた。その歴史的な繋がりのお一人としてハンザキ研の栃本先生もいらっしゃる。

本題の『オオサンショウウオに優しく』と『オオサンショウウオに優しく II』についてだ。この 2 冊には栃本先生が 40 年かけて蓄積されてきた、ハンザキに関する多くの“生態的な事実”が、図表や写真データと共にまとめられている。ハンザキの分布、個体識別法、産卵、成長、変態、闘争、総排出腔開口部周囲の隆起、定住性、再生、摂餌などである。読者はハンザキにおける特徴的な生態を、整理された項目から網羅的に学ぶことができる（表 3-1；表 3-2）。これらによって、ハンザキがどのような生活を送り、どのような一生を過ごすのか、その全体像を俯瞰することも可能となるだろう。また、栃本先生が様々な河川工事で保全事例に関わられてこられた内容も、計 28 の記事にまとめられている。河川工事はそれぞれの現場によって状況が異なるため、一概にこうすればよいという答えを出すのは難しいと思う。多くの事例を参考にして、それぞれのケースで最適解を模索していくことが大切であり、その助けとなる貴重な資料と言える。また『ハンザキ収覧』と同様、製本されて利用しやすいかたちになっていることは大き

な意味をもつ。この業績集の内容をより多くの関係者に活用していただくために、ハンザキ研として製作し、普及していくべきだと考えている。

栃本先生は常々「ぼくのやってきたことを叩き台にして追試して行ってほしい」とおっしゃられている。また、「1年間やったことをそのつどまとめていかないとデータが腐ってしまう」とも論される。ハンザキに関わる人が少なからずいるなかで、どれだけ多くのデータが腐りかけていることだろう……。肝に銘じて、論文や報告文として公表していくよう自分自身を追い込んでいかなければと思う。統計学を学ぶなかで、どうしてもまとまったデータをとって統計処理し、論文にしなければという欲が出る。しかし、まとめなければいけないデータは大量にあり、さまざまなテーマに取り組んでいるうちに何もまとめられないでいてしまう。巨匠ゲーテも“いつかはゴールに達するというような歩き方ではだめだ。一步一步がゴールであり、一歩が一歩としての価値をもたなくてはいけない（手塚 2008）”と注意している。栃本先生の業績集は一步一步このことを実践されてきたものだと感じる。このような引用をしておきながらではあるが、ぼくは将来『ハンザキの生態と保全』という本を出したいと目論んでいる。この骨格は栃本先生の業績集によって形作られているので、それにどのような肉付け（追試）をしていけるかが、ぼくたち後進の役目だろう。ハンザキ研の岡田純博士は、発信機をもちいてハンザキの詳細な移動や定住性を明らかにする研究（Okada et al. 2006）や、規模の異なる河川で個体群がどのように異なっているか（Okada et al. 2008）、ヌシによる卵や孵化幼生の保護（Okada et al. 2015）などを明らかにされてきた。ぼくは、ハンザキの分布（栃本ほか 2007）や、移動と定住性（田口 2009）、堰による移動阻害（田口・夏原 2009）に取り組んできた。広島市安佐動物公園に就職した 2010 年以降はなかな

か論文として成果を出せずにいるが、飼育下のハンザキについて共同研究を進めてきたものが少しずつ論文になってはいる。エコーを用いたハンザキの性別判定（野田ほか 2016）や、寄生虫（田中ほか 2016；田中ほか 2017）、体表にすむバクテリアの研究（Blents et al. 2017）などである。本小文をまとめるに当たり、やるべきことは山積しているが共同研究だけではなく、しっかりと自分自身の研究もまとめていこうとの決心を新たにした。そして、次のハンザキバイブルの作成に関わることができればと強く願っている。

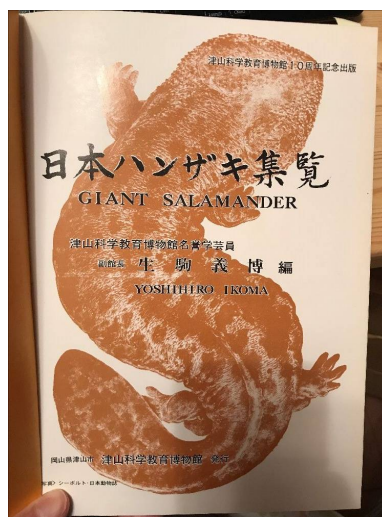


図 1. 『日本ハンザキ集覧（生駒義博編 1973）』に掲載されているハンザキの写生図。

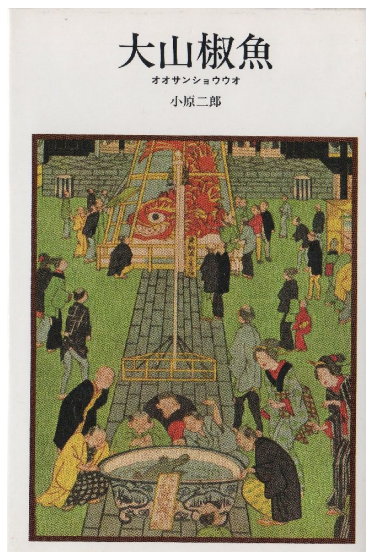


図 2. 『大山椒魚（小原二郎 1985）』の表紙。

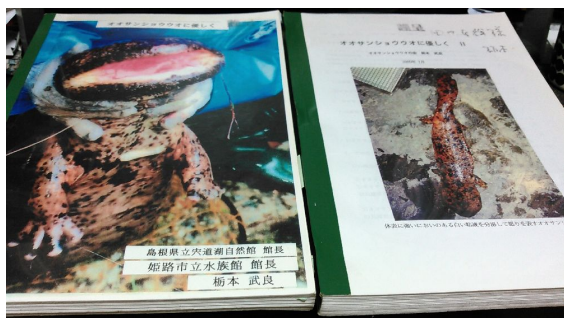


図 3. 『オオサンショウウオに優しく』と『オオサンショウウオに優しく II』の表紙.

参考文献：

- Bletz MC, Vences M, Sabino-Pinto J, Taguchi Y, Shimizu N, Nishikawa K, Kurabayashi A (2017) Cutaneous microbiota of the Japanese giant salamander (*Andrias japonicus*), a representative of an ancient amphibian clade. *Hydrobiologia*, 9: 1-15
- 生駒義博 (編) (1973) 日本ハンザギ集覧. 478 pp, 津山科学教育博物館, 岡山
- 小原二郎 (1985) 大山椒魚. 236pp, どうぶつ社, 東京
- 桑原一司, 中越信和 (2009) : オオサンショウウオ *Andrias japonicus* の繁殖行動の解析—産卵行動の観察記録と動画資料の解説—, 高原の自然史, 14 : 11-50
- 野田亜矢子・野々上範之・田口勇輝・南 心司 (2016) 超音波診断装置を用いたオオサンショウウオの性別判定法. 動物園水族館雑誌, 57 (1) : 1-8
- Okada S, Utsunomiya T, Okada T, Felix ZI (2006) Radio transmitter attachment by suturing for the Japanese giant salamander (*Andrias japonicus*). *Herpetological Review* 37(4): 431-434
- Okada S, Utsunomiya T, Okada T, Felix ZI, Ito F (2008) Characteristics of Japanese Giant Salamander (*Andrias japonicus*) populations in two small tributary streams in Hiroshima Prefecture, Western Honshu, Japan. *Herpetological Conservation and Biology* 3: 192-202
- Okada S, Fukuda Y, Takahashi MK (2015) Paternal care behaviors of Japanese giant salamander *Andrias japonicus* in natural populations. *Journal of Ethology* 33: 1-7
- 田口勇輝 (2009) オオサンショウウオの季節的な移動—流水に棲む両生類による繁殖移動の可能性—. 日本生態学会誌 59 (2) : 117-128
- 田口勇輝・夏原由博 (2009) オオサンショウウオが遡上可能な堰の条件. 保全生態学研究 14 (2) : 165-172
- 田中祥菜・田口勇輝・野田亜矢子・野々上範之・浅川満彦 (2017) 動物園飼育下オオサンショウウオ(*Andrias japonicus*)から得られたアタマビル *Hemiclepsis marginata* (Hirudinida: Glossiphoniidae). 酪農学園大学紀要, 41 (2): 153-154
- 田中祥菜・田口勇輝・野田亜矢子・野々上範之・浅川満彦 (2016) 動物園飼育下オオサンショウウオ(*Andrias japonicus*)における寄生虫学的調査. 日本野生動物医学学会誌, 21 (4) : 137-140
- 手塚富雄 (2008) いきいきと生きよ ゲーテに学ぶ. pp.214, サンマーク文庫, 東京
- 栃本武良・田口勇輝・大沼弘一・川上徳子・清水邦一・土井敏男・柿木俊輔・夏原由博・三橋弘宗 (2007) 兵庫県におけるオオサンショウウオの分布情報. *Human and Nature* (兵庫県立人と自然の博物館 紀要論文) , 18: 51-65
- 和食 萌 (2012) オオサンショウウオの絵に見る江戸時代の研究者たちの視点. うみとすいぞく 31 (3) : 10-11



表1. 『日本ハンザキ集覧(生駒義博編 1973)』の目次

	タイトル	著者	日本年号	西暦	頁
古典(本草書)の部					
1	本草和名	深江輔仁	延喜18年頃	918頃	3
2	倭名類聚抄	原 順	延長年中	923頃	3
3	箋注倭名類聚抄	苅谷望之	文政10年	1827	4
4	和爾雅	貝原好古	元禄元年	1688	5
5	本朝食鑑	平野必大	元禄10年	1697	5
6	大和本草	貝原益軒	宝永5年	1708	6
7	重修本草綱目啓蒙	小野蘭山	弘化元年	1844	7-8
8	日本紀略	著者未詳	不明	不明	9
9	文徳実録	藤原基経	宝永6年	1709	9
10	作陽誌	江村宗晋	元禄元年	1688	10
11	和漢三才図会	寺島良安	正徳2年	1712	11
古典学術書の部					
12	FAUNA JAPONICA 日本動物誌 ハンザキ	シーボルト	文政8年 嘉永元年	1823 1850	15-30
13	Some Notes on the Giant Salamander of Japan (<i>Cryptobatrachus Japonicus</i> Van der Hoe ven) ハンザキの研究	佐々木 忠次郎	明治28年	1895	31-34
14	アンドリアス、シヨウイクセリー 化学教科書 Beitrage zur Anatomie des Japanischen	横山 又次郎	明治28年	1895	35-36
15	Riesensalamanders ハンザキ解剖学的研究	大沢 岳太郎	明治35年	1902	37-143
16	Beitrage zur Lehre von den Eingeweideorganen des Japanischen Rissensalamanders ハンザキ解剖学的研究 内臓編	大沢 岳太郎	明治40年	1907	144-171
17	はんざき調査報告(東京帝室博物館)	石川 千代松	明治36年	1903	172-184
18	Beitrage zur Kenntniss des Riesen-Salamanders, (<i>Megalobatrachus maximus</i> Schlegel) ハンザキ調査報告(東京帝室博物館)	石川 千代松	明治37年	1904	185-190
近代学術書の部					
19	はんざき或は大山椒魚 (岡山県下二産スル特殊動物並ニ該動物ニ関スル研究論 文目録)	岡山県	昭和5年	1930	193-230
20	大山椒魚 (蝶蛸と山椒魚)	田子勝弥	昭和6年	1931	231-246
21	大山椒魚棲息地 (天然記念物調査報告 動物の部 二)	鎌木 外岐雄	昭和7年	1932	247-251
22	大山椒魚棲息地 (天然記念物調査報告 動物の部 三)	鎌木 外岐雄	昭和13年	1938	252-259
23	Studies on Amphibian Chromosomes. 7. On the Chromosomes of <i>Megalobatrachus japonicus</i> ハンザキの染色体研究(東京文理大紀要5-10)	入来重盛	昭和7年	1932	260-276
24	Normentafel zur Entwicklungs geschichte des Japanischen Riesensalamanders (ハンザキの発生段階基準図表)	工藤得安	昭和13年	1938	277-339
25	ハンザキ(オオサンショウウオ) (日本有尾類総説)	佐藤 井岐雄	昭和18年	1943	340-367
26	赤いハンザキと百才のハンザキ (採集と飼育 15巻2号)	生駒義博	昭和28年	1953	368-370
27	ハンザキノート (採集と飼育 22巻7・8・9号)	生駒義博	昭和35年	1960	371-381
28	ハンザキ(オオサンショウウオ)の研究 (津山科学教育博物館開館記念誌)	生駒義博	昭和38年	1963	382-391
29	Discovery of the Fossil Giant Salamander (<i>Megalobatrachus</i>) in Japan 日本の化石ハンザキ 日本古生物学会誌45	鹿間時夫 長谷川 善和	昭和37年	1962	394-399
30	オオサンショウウオ(大山椒魚) 一名ハンザキ (岡山清 心学園紀要)	佐藤清明	昭和46年	1971	400-403
31	大山椒魚の性徴と東亜大陸からの <i>Sieboldia davidiana</i> につ いて (日本生物地理学会会報、第16~19巻)	岩間春夫	昭和30年	1955	404-408
32	ハンザキの (<i>Megalobatrachus japonicus</i>) 発生段階図	岩間春夫	昭和43年	1968	409-438
33	「遺稿」大山椒魚の研究史	岩間春夫	昭和48年	1973	439-455
34	日本ハンザキ雑記	生駒義博	昭和48年	1973	456-472

表3-1. 『オオサンショウウオに優しく』の目次

タイトル	掲載	年	頁
1 オオサンショウウオの生物学	日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料Ⅱ 両生・爬虫類	1995	1-10
2 オオサンショウウオの調査法	兵庫生物9(5)	1989	11-14
調査用具の工夫	兵庫生物10(5)	1994	15-20
個体識別法	動物園水族館雑誌31(4):112-116	1991	21-25
個体識別法(2)	日本爬虫両棲類学会報2000(1):26	2000	26-27
3 オオサンショウウオの産卵場所	動物園水族館雑誌35(2):33-41	1994	28-36
産卵場所の復活の試み	動物園水族館雑誌37(1):13-17	1995	37-41
保全工事の事例			42-44
多自然型工事とヒトの生活			45-46
生態系の頂点にあるオオサンショウウオと河川工事(Ⅰ)	多自然研究8	1996	47-52
生態系の頂点にあるオオサンショウウオと河川工事(Ⅱ) 兵庫県朝来郡生野町市川	多自然研究11	1996	53-57
生態系の頂点にあるオオサンショウウオと河川工事(Ⅲ) 大阪府豊能郡能勢町天王川	多自然研究14	1996	58-61
生態系の頂点にあるオオサンショウウオと河川工事(Ⅳ) 兵庫県多紀郡篠山町西山川	多自然研究20	1997	62-65
生態系の頂点にあるオオサンショウウオと河川工事(Ⅴ) 兵庫県朝来郡生野町市川(2)	多自然研究31	1998	66-69
生態系の頂点にあるオオサンショウウオと河川工事(Ⅵ) 兵庫県多紀郡篠山町西山川(2)	多自然研究35	1998	70-73
圃場整備に関する希少生物の保護と多自然型工事(Ⅰ) 兵庫県小野市来住町きすみの地区	多自然研究44	1999	74-79
4 オオサンショウウオへの対処			
オオサンショウウオをモニタリングするための手法と考え方	川上ダムオオサンショウウオ生息環境調査・解析業務 報告書(財団法人水資源協会、社団法人淡水生物研究所)	1999	80-91
オオサンショウウオの保護	鳥取県文化財保護事務必携	1995	92-98
設計もいらない簡単な工夫		1995	99
5 山のうへの魚たち	(姫路市立水族館だより)		
オオサンショウウオの生態 その1	山のうへの魚たち15:1-4	1976	100-103
オオサンショウウオの生態 その2	山のうへの魚たち18:1-3	1988	104-108
オオサンショウウオの生態 その3	山のうへの魚たち26:1-4	1995	109-111
人と動物との共生	山のうへの魚たち29:1-4	1996	112-115
オオサンショウウオと共存できる環境づくりの試み	山のうへの魚たち32:1-4	1998	116-119
シーボルトのオオサンショウウオ	山のうへの魚たち37:1-3	2000	120-122
オオサンショウウオのたべもの	山のうへの魚たち38:1-4	2001	123-126
6 オオサンショウウオの文献			
日本産有尾類総説(佐藤井岐雄)	三省堂	1937	
日本ハンザキ集覧(生駒義博編)	津山科学教育博物館	1973	
大山椒魚(小原二郎)	どうぶつ社	1985	
日本産主要動物の種別文献目録(大野正男)	東洋大学紀要	1991	127-128
オオサンショウウオの文献目録(柄本武良)	兵庫陸水生生物51・52:115-129	2000	129-144

表3-2. 『オオサンショウウオに優しく(Ⅱ)』の目次

タイトル	掲載	年	頁
1 オオサンショウウオの生物学			
1) オオサンショウウオ	ひょうごの野生動物:80-81	1997	1-4
2) 特別天然記念物 オオサンショウウオ	季刊文化財105:2-5	2003	5-9
3) 清流の主オオサンショウウオの素顔を追って	大山椒魚:92-94	2003	10-15
4) 溪流の生ける化石オオサンショウウオ	兵庫の生きものたち:91-94	2004	16-23
2 オオサンショウウオの分布			
1) 第2回自然環境保全基礎調査 兵庫県	第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査(両生類・は虫類):99pp	1979	24-65
2) オオサンショウウオの研究Ⅱ 分布と調査地	兵庫生物9(4):206-208	1988	66-69
3 オオサンショウウオの生態調査と個体識別			
1) 兵庫県市川水系におけるオオサンショウウオの生態Ⅲ. 斑紋について	動物園水族館雑誌32(4):90-93	1992	70-74
2) オオサンショウウオの研究Ⅳ. 再捕状況	兵庫生物10(1):28-30	1990	75-78
3) オオサンショウウオの生態調査と個体識別	ホシザキグリーン財団研究報告7:169-178	2004	79-89
4) オオサンショウウオの生態調査と個体識別Ⅱ	ホシザキグリーン財団研究報告8:173-183	2004	90-101
4 オオサンショウウオの繁殖生態と成長			
1) 兵庫県市川水系におけるオオサンショウウオの生態Ⅱ. 野外における成長	動物園水族館雑誌32(1):14-20	1991	102-109
2) オオサンショウウオの研究Ⅴ. 繁殖生態1	兵庫生物10(2):68-71	1991	110-114
3) オオサンショウウオの研究Ⅵ. 繁殖生態2	兵庫生物10(3):100-103	1992	115-119
4) 兵庫県市川水系におけるオオサンショウウオの生態Ⅵ. 変態について	動物園水族館雑誌34(2・3):28-32	1993	120-125
5) オオサンショウウオの研究Ⅶ. 変態	兵庫生物10(4):131-134	1993	126-130
6) 兵庫県市川水系におけるオオサンショウウオの生態Ⅷ. 繁殖生態について(2) 闘争	動物園水族館雑誌36(2):51-57	1995	131-138
7) 兵庫県市川水系におけるオオサンショウウオの生態Ⅸ. 繁殖生態について(3) 総排出口開閉口周囲の隆起について	動物園水族館雑誌37(1):7-12	1995	139-145
8) 市川におけるオオサンショウウオの人工巣穴設置の試み 一産卵場の復活にむけて一	兵庫陸水生物50:95-102	1999	146-154
5 オオサンショウウオの生態一般			
1) 兵庫県市川水系におけるオオサンショウウオの生態Ⅵ. 定住性について(1)	動物園水族館雑誌33(3):49-52	1992	155-159
2) 兵庫県市川水系におけるオオサンショウウオの生態Ⅴ. 定住性について(2)	動物園水族館雑誌33(4):85-90	1993	160-168
3) オオサンショウウオの餌①	兵庫陸水生物44:31-32	1994	167-169
4) 兵庫県市川水系におけるオオサンショウウオの生態ⅩI. 再生	動物園水族館雑誌38(2):33-39	1996	170-177
5) 飼育下におけるオオサンショウウオの再生について	動物園水族館雑誌38(3):65-68	1997	178-182
6) オオサンショウウオの皮膚粘液レクチンの性状	平成8年度日本水産学会春季大会:161		183-184
7) Parasitic Helminths Collected from the Japanese Giant Salamander, <i>Andrias japonicus</i> (Temnick, 1837) (Amphibia: Cryptobranchidae), in Japan	Comp. Parasitol. 69(1):33-42		185-194
8) オオサンショウウオの研究Ⅹ 一摂餌生態1一	兵庫生物12(3):134-139	2002	195-200
9) オオサンショウウオによるアオダイショウの捕食	両生類誌10:21-22	2003	201-202
10) オオサンショウウオの研究ⅩI 一摂餌生態2一	兵庫生物12(5):261-265	2004	203-207
6 オオサンショウウオと河川工事			
1) 河川工事とオオサンショウウオの保護について	兵庫陸水生物41:35-42	1992	208-217
2) 河川工事とオオサンショウウオの保護について2	兵庫陸水生物42:35-39	1992	218-223
3) 河川工事とオオサンショウウオの保護について3	兵庫陸水生物43:25-30	1993	224-230
4) 河川工事とオオサンショウウオの保護について4	兵庫陸水生物44:25-30	1994	231-237
5) 河川工事とオオサンショウウオの保護について5	兵庫陸水生物45:52-56	1994	238-243
6) 河川工事とオオサンショウウオの保護について6	兵庫陸水生物47:61-66	1996	244-250
7) 護岸工事と水生生物の生息環境保全	兵庫陸水生物45:57-58	1994	251-253
8) 河川工事とオオサンショウウオの保護について7	兵庫陸水生物49:77-81	1998	254-259
9) 水辺への招待 一人と生きものたち 河川工事とオオサンショウウオ	水辺フォーラムMin加古川:1-4	1996	260-265
10) 河川工事と環境アセスメント 一オオサンショウウオとその保全一	JEAS NEWS 70:19-22	1996	266-270
11) オオサンショウウオとの共存を求めて	兵庫生物11(4):174-177	1998	271-275
12) オオサンショウウオの保全対策工事	兵庫の自然11(4):120-121	2001	276-279
13) オオサンショウウオの生態と多自然型河川工事	ホシザキグリーン財団研究報告5:247-263	2001	280-296
14) オオサンショウウオと河川工事	環境保全学の理論と実践Ⅲ:45-73	2003	297-326
15) オオサンショウウオのすめる川	生物による環境調査辞典:268-271	2003	327-332
7 その他			
1) オオサンショウウオの研究Ⅸ 一用語について一	兵庫生物11(2):59-62	1996	333-337
2) オオサンショウウオ資料室オープン	山のうえの魚たち40:8	2002	338
3) 水族館生活40年を振り返って(中)	山のうえの魚たち42:2-3	2003	339-340
4) 水族館生活41年を振り返って(下)	山のうえの魚たち43:2-3	2003	341-342
5) 水族館生活を終えるに当たって	山のうえの魚たち44:2-3	2004	343-344
6) オオサンショウウオの再生の話	山のうえの魚たち44:4-5	2004	345-346
7) オオサンショウウオの文献目録Ⅱ	ホシザキグリーン財団研究報告6:173-191	2003	347-366
8 参考(文献集)			
1) 日本ハンザキ集覧	生駒義博 34編	1973	
2) 日本産主要動物の種別文献目録	大野正男 570編	1991	
3) オオサンショウウオの文献目録	栃本武良 266編	2000	
4) オオサンショウウオの文献目録Ⅱ	栃本武良 458編	2003	
5) オオサンショウウオの文献目録Ⅲ	栃本武良 400編	2005	
6) オオサンショウウオに優しく	栃本武良 23編	2001	
7) オオサンショウウオに優しくⅡ	栃本武良 50編	2005	
8) 栃本武良著作目録	栃本武良 152編		367
9) 栃本関係文献目録	栃本武良 65編		377

ダイビングスポットとしての長良川

会員 下村俊孝

私はスノーケリングやスクーバダイビングでオオサンショウウオを観察したり写真を撮ったりして楽しんでいます。



写真1 こんな感じで潜ってます

岐阜県の長良川（ながらがわ）の中流域に「小倉公園下」と私が勝手に呼んでいるポイントがあります。ここには大きな河原があり、夏や秋になると水遊びやBBQを楽しむ人で賑わいます。川幅も広く、水位にもよりますが水深は深いところで8~9メートル程になります。特に真夏は、まるで中古車市場のように河原が車で埋め尽くされるほどです。地元の子供達が旧美濃橋から飛び降りる光景も見られます。私も1988年頃からよく「小倉公園下」で水遊びやBBQを楽しんでいます。川に潜ると、たくさんの魚が見られ美しい水中の景色が見られます。そんな美しい水中世界に息を止めずにずっと居られたらいいなと思い、スクーバダイビングを始めるようになりました。



写真2 小倉公園下

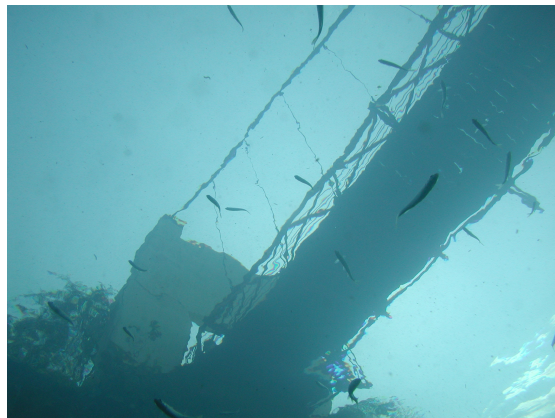


写真3 水中から見た旧美濃橋

ダイビングを始めてからは、海にばかり潜っていたのですが、2006年に「小倉公園下」に潜ってみたところ偶然オオサンショウウオに出会いました。1メートル程もあり黒々としていました。予想外の出会いにビックリ、ドキドキして、夢中で写真を撮った事を覚えています。長良川にオオサンショウウオがいることを知らなかったもので、見た時は本当に驚きました。インターネットで嘘や誤解も含めて調べてみると大変興味深い生物であることがわかり、何よりもあの絶妙なフォルムを見て、すっかりオオサンショウウオのファンになりました。その後、長良川の中流域をいろいろ潜りました。最近はその中でも安定してオオサンショウウオが見られるいくつかのポイントを回っています。



写真4 美濃市の長良川



写真 5 オオサンショウウオとダイバー



写真 6 オオサンショウウオとご対面

やはり同じことを考えるダイバーもいたのでしょう。ここ数年は「小倉公園下」にオオサンショウウオを見に来るダイバーが増えてきました。遠方からもダイビングショップのツアーで来られる方もみえるようです。

長良川にはいろいろな方が来られます。水辺で水遊び、BBQ、釣り、ラフティング、カヌーなど。もちろん漁師さんもいます。真夏は川底にゴミが増えます。ゴミを捨てたり、持ち帰らな

い悪質なタイプもいれば、持ち物が風で飛ばされて川に流され、結果的にゴミになってしまうこともあります。

釣り人とラフティングやカヌーをしている人とのトラブルはよく見かけます。釣り人は竿を出している前を通られると邪魔をされる気分になるのでしょうか？「鮎が逃げるじゃないか！」「あっちに行ってくれ！」は心ない一部の釣り人や漁師の常套句ですね。みんなの川なのでお互い気を使いながらマナーを守って楽しみたいものです。また、みんなの川であると同時にそこに住む生物みんなの川でもあります。人が立ち入れば少なからず環境にインパクトを与えてしまいます。わたしたち人間はその環境にお邪魔させてもらっている気持ちでそこに住む生物にもう少し敬意をはらって謙虚に接するべきだと思います。

ダイビングの場として川を利用する私は少数派のため、誤解されやすいので気を使います。鮎の解禁の時期は釣り人がいるところでは潜らないようにしています。漁師さんに誤解されないように仕掛けがある近くでは潜らないようにしています。また「水中にダイバーがいます。写真を撮っています。」と書いた物を置いて川に入るようにしています。



写真 7 水面に呼吸に向かうオオサンショウウオ



写真 8 撮影中のダイバー

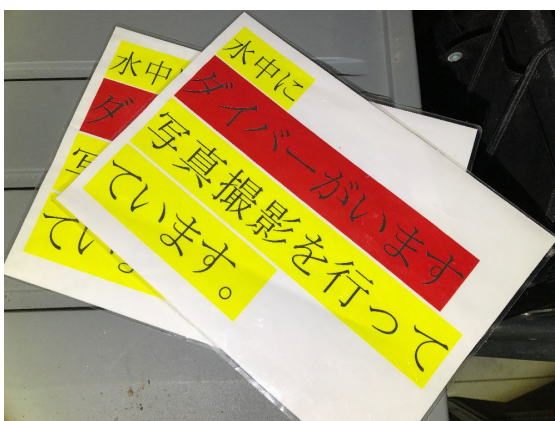


写真 9 水中にダイバーがいます



写真 10 川底に集まるオオサンショウウオ

長良川は、岐阜県郡上市の大日ヶ岳を水源に岐阜県愛知県三重県を経て伊勢湾に流れる木曾川水系の一級河川。濃尾平野を流れる木曾三川のひとつで河川延長は 166km。鵜飼が有名、日本三大清流の一つと言われている。下流にある長良川河口堰以外は治水目的のダムはない。

郡上市大和町にある小間見川は昭和 8 年 2 月 28 日にオオサンショウウオの生息地として国の天然記念物に地域指定された。小間見川は大和町で長良川本流に流入する。

また、郡上市和良町にある和良川は昭和 2 年 4 月 8 日に、郡上市八幡町にあり和良川に流入する鬼谷川は昭和 7 年 12 月 19 日に、同じくオオサンショウウオの生息地として国の天然記念物に地域指定されている。和良川は馬瀬川を経て木曾川水系の飛騨川に流入する。



写真 11 和良町オオサンショウウオ生息地の碑

長良川には国の天然記念物であるネコギギも生息する。(ネコギギ：ナマズ目に属する淡水魚で、伊勢湾と三河湾に注ぐ三重、愛知、岐阜などの河川に分布している。比較的目が大きくてかわいい♡確かに猫っぽい?日本固有種。)



ハンザキ研あれこれ

これは使える!!

T. T 式捕チュウ器とハン研のネズミ標本

会員 清水善吉 (三重自然誌の会)

兵庫県朝来市生野町黒川にある日本ハンザキ研究所 (略称・ハン研) は、廃校となった黒川小中学校を活用して 2005 年に開所され、それ以降、同研究所所長の栃本武良氏が居住しています。人が住みだすとネズミは目をつけますので、栃本所長も当初からネズミ害には悩まされていたようで、日本ハンザキ研究所ニュース (以下、ニュース) 12 号 (2007 年) に粘着ワナで捕獲したヒメネズミが記録されています。

しかしながら、粘着ワナで捕獲されたネズミは悲惨な状態となり、当然死亡してしまいますので、鳥獣保護および動物愛護の観点からは望ましくありません。そこで、栃本所長は、お金がかからずネズミにも優しい捕獲器を考案しました。このネズミ捕獲器は「T. T 式捕チュウ器」と命名され、氏が開発したハンザキ調査グッズの数々とともに某庁に登録されているとやら? この捕チュウ器は、これまで私も含めてネズミ屋の誰もが気づかなかった優れたものですので、まずは制作方法を紹介します。

【準備物】

ペットボトル 2 本 (同型を 2 本)、長さ 40~50 cm・幅数センチの発泡スチロールの板、カッターナイフ、大型輪ゴム

【作り方】

- ①ペットボトル 2 本の肩の部分と 1 個は底も切り取る。
- ②底を切り取ったペットボトルを上差し込む。
- ③連結したペットボトルの側面に発泡スチロール板を輪ゴムでとめて完成。

【使用方法】

- ①捕チュウ器の底に餌 (ピーナッツやサツマイモなど) を入れ、ネズミの糞やかじり跡のある場所にセットする (写真 1)。

- ②夜間又は翌朝に見回り、捕獲されていたら離れた場所に放獣。冬期は夜間に回収しないとネズミ自身の尿でぬれて凍死するので注意。



写真 1 T. T 式捕チュウ器

当初は 1 本のペットボトルで作っていたのですが、この高さ (20 cm ほど) だと跳躍力のあるアカネズミやヒメネズミは餌だけ食べてから楽々と逃げだすそうです (ニュース 60 号)。2 本連結してもアカネズミは飛び出すことがあるそうで、助走もできない狭い空間での跳躍力にはビックリポンです。また、ヒメネズミはとくに死んでしまいやすいようなので、無用な殺生を避けるためには頻繁な見回りが必要です。

ハン研では、不幸にも捕チュウ器内で死亡してしまった個体や敷地内で発見した動物遺体を収集し、地域自然誌の資料として保管しています。そのなかで小型哺乳類について調査をさせていただき、モグラ類については報告しましたので (清水・栃本 2016; ホシザキグリーン財団

研究報告 19 号), ここではネズミ類の標本リストを以下に掲載します。

ヒメネズミ *Apodemus argenteus*

2010 年 11 月 9 日 (3 個体), 同年 12 月 8 日 (1 個体), 2012 年 5 月 14 日 (2 個体), 2013 年 4 月 (1 個体), 2015 年 2 月 26 日 (1 個体), 同年 5 月 20 日 (1 個体), 同年 5 月 29 日 (1 個体), 採集日不明 (1 個体). 計 11 個体

アカネズミ *Apodemus speciosus*

2010 年 12 月 14 日 (2 個体), 2014 年 12 月 31 日 (1 個体), 同年 12 月 (1 個体), 2015 年 5 月 12 日 (1 個体), 採集日不明 (2 個体). 計 7 個体

スミスネズミ *Eothenomys smithi*

2008 年 9 月 30 日 (1 個体)

クマネズミ *Rattus rattus*

2012 年 9 月 19 日 (1 個体)

採集場所はいずれも兵庫県朝来市生野町黒川で, 3 次メッシュコードは 5234-6750 です。

なお, 捕獲後に放獣したネズミ類についてのデータがあまり残されていないのは残念ですが, ニュース 61 号 (2011 年) には 2010 年 12 月にアカネズミ 11 個体, ヒメネズミ 2 個体と記録されています。また, クマネズミについては「宅配便の車」に便乗してきたのではないかと推測しています (ニュース 79 号)。しかしながら, 本種は熱帯ジャングル起源のネズミであり, 国内でも小笠原や南西諸島では野外にも生息しており (矢部, 2002; 外来種ハンドブック, 地人書館), 本州でも紀伊半島の熊野山中で本種の轍死体を確認したことがあります (清水, 未発表)。生野でも野外に生息する可能性は十分にあると思われしますので, 今後も注意が必要です。クマネズミは T. T 式捕チュウ器による捕獲ではなく, 市販のカゴワナで捕まえたそうです。また, スミスネズミも捕チュウ器による捕獲ではなく, 敷地内での死体拾得による収集です。

最後に, ハン研周辺の環境についてふれておきます。施設は, 瀬戸内海に流下する市川の源流域にあり, 助広山 (仮称, 標高 685m) 山麓の標高 465m の地点に位置しています。研究所の北および西側は川が流れ, 南および東側が山地となっており, 山地と施設の間にはかつて運動場であった広場があり, 駐車場としての利用や一部はビオトープとして整備され湿地や草地となっています。広場から続く山地は, 南部はスギ・ヒノキの人工林となっており下層植生は貧弱ですが, 南東部はクリやヒノキ, アカマツなどが優先する混交林で下層にはクリ, ヤマボウシ, ミツバツツジなどが生育し, 秋にはみごとな紅葉も見られます (写真 2)。四季折々のハン研にぜひ足をお運び下さい。

末筆ながら, 標本調査の機会を与えていただき, さらに校閲をしていただいた栃本武良所長に感謝いたします。



写真 2 秋のハン研



写真 3 巣箱で繁殖するヒメネズミ (本文とは関係ありません)

同窓会

理事長 栃本武良

年齢を重ねてくると、昔の机を並べて学んだころの級友たちが懐かしくなってくるようだ。東京で小学校から大学、そして教師生活を過ごした 24 年間であるが、今では兵庫県での生活が 50 年を超えている。学友たちのほとんどは関東圏で生活をしており、関西方面にはわずかな友人しかいない。

還暦を迎えた時期に立川市立第三中学校の 5 期生の同窓会があった。それまでも何回か行われていたのだが、東京まで同窓会のためだけで出向く気持ちになれず欠席をしていた。60 歳という節目に思い切って上京したが、当時の担任の 5 人の先生のうち 3 人の先生がお元気な顔を見せていた。その中のお一人は兄の、もう一人は妹の担任でもあったのだが、私が中学 2・3 年の時の担任の先生には兄が 2 年間、妹が 1 年間と兄弟 3 人で 5 年間もお世話になった先生だった。どうも私は子供時代と様変わりが大きかったようで、誰であったのかと皆を悩ませたようだ。受付をしていた小学校時代の初恋の人も困っていたので名乗ると大変驚いた様子だった。おまけに、私は当日、東京駅で先生を発見するという事になった。先生は東京の自宅とは別に、仙台の青葉山の緑を守る会の代表として頑張っておられたので、その日は東北新幹線で雪のため 10 分遅れて東京駅に着いたとのことであつた。私は、上京するときには姫路駅始発の 6 時の新幹線で 9 時頃に東京に着くようにしていた。余裕の時間は博物館や本屋などを巡っての情報集めに使っていた。少し早めに立川へ行こうと中央線のホームに上るエスカレーターに乗った。気の遠くなりそうな長い長いのぼりで上をぼんやりと眺めてまだかまだかと思っていた私の視野に先生の横顔がいきなり飛び込んできてびっくりした。エスカレーターの私の前にはご婦人が乗っていたので 2 段くらい遅れて乗

りました。その高さがちょうど上を見つめていた私の視野に先生のお顔が入る高さだったようです。こんなに驚いたことはありませんでした。まさか人違いではと思いつめて失礼ながら斜め上からうかがうと間違いなく先生だったので。ちょうどホームに着く寸前だったので声をかけて先生が立ち止まったりされたら将棋倒しになって大惨事になりかねません。ホームには多くの人がいて見失わないようにと必死で先生の後についていき、人の流れから先生がそれるのを待って声をかけたのでした。こんな奇跡的なことが起こるなんて、中学時代には先生の手を焼かせた不詳の教え子としては大手柄だったかと思っています。

67 歳になったころ、教師時代に顧問をしていた生物部の生徒たちが「還暦になりました」と、はるばるハンザキ研までやってきた。生徒と一緒に遊んで遊んでいた生物教師だが、長い一生のうちのたったの 2 年間の出会いではあったものの、良い時間を共にすることができたのだと思っている。22~24 歳という人生経験も教育者としての経験もない、ただただ若さに任せての、好き放題をやっただけかもしれないが彼らとのつながりは今も強く続いている。

東京水産大学増殖学科は生き物好きの集まりである。関東方面での同窓会が続いていたようだが、関西のメンバーの参加が少ないということで京都でやるから出て来いという連絡があつてせっかくの心遣いなので参加した。京都の幹事が舞妓と芸子さんと呼んで京都らしさを感じてほしいと言っていたが、芸子のお姉さんが姫路育ちで姫路市立水族館には子供のころに行ったことがあるというので驚きました。次の同窓会の幹事が名乗り出ないので、一度くらいお役に立とうということで、ハンザキ研へと提案しました。あいにくの悪天候で野生のハンザキを見てもえなかったのが残念でしたが、ハンザキ研は満足していただけたようです。同じころ、大学の 1 年下の学年が東西から集まりやすいか

らか？姫路で同窓会をするという話が聞こえてきました。姫路でやるのもいいが、何にもないがハンザキだけはたくさんいるのでハンザキ研に来ないかと声をかけたら実現したのです。やはり、生き物好きのグループですね。この学年には私が一人でやっていた弓道同好会の後輩が 3 人もいたので、偉くなっている彼らと呼ばび捨てにして先輩面をしました。中には、自分の方が年長だというもいたのですが運が悪かったのでしょうか。このグループもまたみぞれの悪天候で野生のハンザキを見てもらえませんでした。

昨年の 9 月には中学校の同窓会を当地で実現できました。担任の先生の長年の望みが実現して十数名の同窓と久しぶりに歓談しました。先生は一回りも上にもかかわらず、一番元気のように見えました。あの高さ 90 メートルの黒川ダムに登りたいといわれたくらいで、今なお外国へスケッチ旅行に時々ゆかれるとのことでした。この時には卒業以来初めて会う同窓もいて大変うれしいことでした。

今後の予定としては、国立高校時代の同窓、芝学園の生物部 OB 会そして、私が唯一担任をした芝学園中学 2 年生の同窓会を考えています。ぜひ実現させたいものです。



芝学園 生物部 OB 2008. 11. 1



東京水産大学 増殖学科 11 回生 2014. 10. 22



立川市立第三中学校 5 期生 平成 28 年 9 月 16 日



東京水産大学 増殖学科 12 回生 2014. 11. 29

生き物レポート

沖縄カエル旅行記

会員 松田裕太

私は鳥取県にある環境調査会社で、オオサンショウウオ等の生物に関する仕事に携わっている。今回は、そんな私が、2017年4月初旬に島の環境とカエルを見るために行った沖縄旅行で感じたことを記したい。

島の生物

写真1は、私が沖縄本島で一番最初に出会ったカエルである。今回の旅行で最も印象に残っているカエルだ。私は当初、このカエルが本土でよく見るニホンアマガエル (*Hyla japonica*) にしか見えなかった。ただ、驚く程にジャンプするので違和感を覚えた。さて、このカエルはなんだろうか？持ってきた図鑑と睨め合うこと30分、リュウキュウカジカガエル (*Buergeria japonica*) という結論に達した。後から聞いた話では、沖縄ではよく見られるカエルらしい。このカエル以外にも沖縄本島では、本島固有の何種類かのカエル (例えば、オキナワイシカワガエル *Odorrana ishikawae* 写真2、ナミエガエル *Limnodynastes namiyei* 写真3) を見ることができた。しかし、私がいつも鳥取県で見るカエルと、雰囲気似ているものもいるが何かが違う (私にはうまく説明できないが、この何かは大事なんだと考えています)。私は、島という環境が膨大な時間をかけて作り上げた、この“違い”に直接触れ漠然とではあるが島の特異性を感じることができた。



写真1 リュウキュウカジカガエル (沖縄本島)



写真2 オキナワイシカワガエル (沖縄本島)



写真3 ナミエガエル (沖縄本島)

広大な森林

沖縄本島でもうひとつ印象に残っているのが、沖縄本島北部に存在する、いわゆる「やんばるの森」の広大さである。私は今まで、これほどに広大な森を見たことが無かった。さらに、高い山が見えなかったせいか、まるで森の絨毯が一面に広がっているかのように感じられた。まさに絶景である (写真4)。この森の所々には見たこともない木が存在し、私はまるで異世界にでも来ているような何ともいえない感動を覚えた。

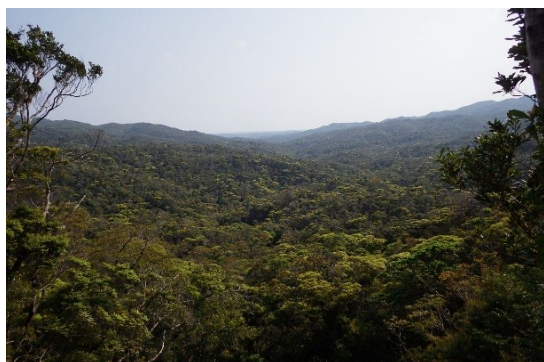


写真4 沖縄本島北部、やんばるの森での一枚

カエルの声に耳をすまして

旅の後半に訪れた西表島では、田んぼ地帯でカエルを探すことが多かった。到着初日には、日暮れとともにカエルの合唱が始まった。よくよく聞いてみると、一番多い鳴き声のほかに、ちょっと高い鳴き声や、きれいな鳴き声も聞こえる。通常であれば、この違いが分からなかったのだろうが、私には心強い武器があった。

西表島に到着してまず立ち寄った西表野生生物保護センター（イリオモテヤマネコをはじめとする西表の野生生物の普及活動、調査研究を行うための拠点施設）では、西表島に生息するカエルの鳴き声を聞くことが出来る展示が存在する。私のスマホの中には、ここで録音したカエルの鳴き声が入っていたのだ。実際の鳴き声と、録音した鳴き声を聞き比べてみると、意外と目星がつくものである。これにより、4 種類ぐらいの鳴き声があることが判明した。その中でも一番の大合唱をしている声の主達を探していると、地面に開いた穴の中に雄々しい？声で鳴く、小さな小さな、その声の主を見つけた。ヒメアマガエル (*Microhyla okinavensis*) である (写真 5)。体長は 2~3cm ぐらいだろうか。何とも可愛い姿をしている。この他にも田んぼ周辺で声を聞きたいいくつかのカエルを見ることができた。私はこの日、ただただカエルの声に耳をすましてみることの面白さに気づくことが出来た。



写真 5 ヒメアマガエル (西表島)

今回の旅行で島独特の環境・生態系の面白さに、ほんの少しではあるが触れることが出来た。一方で、ここにしかない生物、ここにしかない環境が面的に小さい島に存在しており、様々な圧力（例えば、森林の減少や外来種の侵入など）に対する脆さも感じる事が出来た。

今回のような経験は普段なかなか出来るものではないだろうが、「井の中の蛙」のままでは自身が今いる環境を同じ視点で見がちになってしまう。そういった意味でもとても有意義な時間であった。今すぐにでも新たな旅に出かけたい気分だが、散財した私にそんなお金は残っていないので、しばらくは鳥取県のカエルの声に耳をすましてみることにしよう。

最後に、私が観察した生物について同定して頂いた日本ハンザキ研究所副理事長 岡田純博士に感謝申し上げます。

追記：なお、沖縄本島の北部および西表島は、平成 28 年 9 月 15 日、昭和 45 年 5 月 15 日にそれぞれ国立公園に指定されている。そこに生息する生物は、種の保存法や天然記念物などの法規制をうけているものも存在するため、訪れる際には事前に情報収集を行うことが必要である。



写真 6 西表島浦内川のマンングローブ

生き物あれこれ

ムササビの話

麻布大大学院生 手塚 海香

2～3年ほど前、素人ながらムササビという動物の観察を頻繁に行う機会がありました。そのため、その時学んだ日本最大のネズミ目である彼らの生態と魅力を、ほんの少しだけお話ししようと思います。

・ムササビとは

ムササビは、森に住んでいて、滑空する動物…というのは多くの方がご存知かと思います。彼らは樹上性の動物で、地上に降りることは滅多にありません。滑空時に誤って地上に転落する例もあるみたいですが、そんなときムササビは慣れない地上で大パニックを引き起こします。彼らにとって木は生活する上でなくてはならないもののようです。

・空飛ぶ座布団

ムササビは滑空をするとき、いつもは閉じている皮膜という部分を広げて空中へ飛び出します。滑空というと格好良く空を飛ぶようなイメージですが、鳥のように空を飛ぶのではなく、グライダーのように緩やかに落下しています。ムササビがその滑空に不可欠な皮膜を広げると、おおよそ座布団と同じくらいのサイズになります。そのため、ムササビの異名は「空飛ぶ座布団」です。座布団と同じ大きさの獣が、アツという間に頭上を通り過ぎる瞬間は実に感動モノです。

昔の日本では、「野衾」という人の生き血を吸う獣のような妖怪が存在していたようですが、実はこの正体がムササビだと云われています。もし、大昔の電燈もない真っ暗な森の中を歩いていた時、ふと座布団大の未知の生物が頭上を通り過ぎたら…。おまけに彼らは「グルルーグルルー」とビックリするほど大きな音量で不気味に鳴きます。これではムササビを妖怪と勘違

いしても不思議ではないかもしれません。ところが、ムササビは生き血を吸うどころか、人を襲うことはまずありません。食事は、葉や木の実などをよく食べます。鳴き声も警戒音で、決して威嚇をしているわけではありません。

・ムササビ観察のススメ

実はムササビは、とても観察しやすい野生動物でもあります。

彼らは夜行性で、昼の間は樹洞という木に空いた空洞の中でグウグウ眠っています。樹洞だけではなく、民家の屋根や、鳥用に設置した巣箱に入り込んでいることもあるみたいです。そして毎日、日没後に活動を始め、眠っていた場所を飛び出します。つまり、彼らが眠っている巣穴さえ判明すれば、日没前に巣穴の前で待機することで、ほぼ確実に彼らの姿を見ることができます（くれぐれもムササビの出走を妨げないよう、静かに待つことが大事です）。また、ムササビは日没後 30 分～2 時間の間に、食事をしたりトイレをしたり活発に行動するので、個体数が多い生息場所では至る所で彼らの滑空が観察できます。

ムササビ観察の魅力的なところは、ムササビが夜行性の野生動物にもかかわらず、観察だけなら夜遅くまでかからないという点です。また彼らは森の奥ばかりに生息しているわけではなく、民家のすぐ近くの森に住んでいることもあります。現在、全国各地で観察会が行われています。ぜひ愛すべき日本の哺乳類、空飛ぶ座布団ムササビを観に参加してみたいかでしょうか。



屋根裏から出走しようとしているムササビ

ムササビとモモンガの違い

意外と知られていない！

・サイズ
ムササビの体長は
モモンガの
おおよそ3倍！
その分ムササビは
滑空の飛距離も長い。

ちなみにムササビと
モモンガの目は
実は同じくらいのサイズ。
モモンガの方が顔が
小さいので、
愛くるしい顔に
見えるかもしれない。

・生態
ムササビの生態については
よく研究がされていますが
モモンガはあまりよくわかっていません。
これはモモンガの生息地が
標高の高い森林の場合が多く
個体数が少ないからだと考えられます。

▼ホオジロムササビ

ホオが白いから
ホオジロ。
日本には
この種のみ。



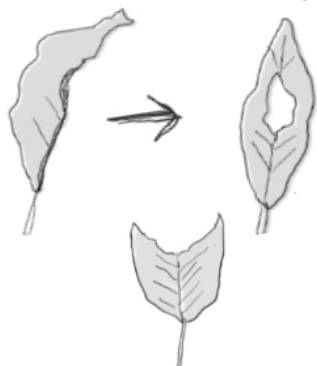
・針状軟骨
ムササビは針状軟骨という
可動式のホネを持っています。
針状軟骨は、
普段は折りたたまれて
いますが、滑空をするときに
動かし、皮膜を広げます。
モモンガはこのホネを
持っていません。

・ナワバリ
ムササビは基本
一つの巣穴に一匹が寝ます。
(子育ての時期を除く)
一方モモンガは
一つの巣穴に数匹同居する
場合があります。

◀ニホンモモンガ

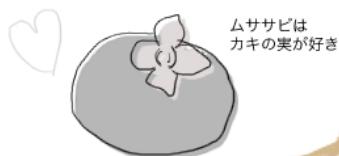
日本ではフクロモモンガが有名ですが
フクロモモンガはペットとして
他国から輸入されたもので
野生にはいません。

ムササビの食事



◀ ムササビの食痕は左右対称になっています。
これはムササビが葉を折り畳んで
食べているためです。

ムササビは、一口二口食べて
ポイっとご飯を捨ててしまいます。
これは、葉にある毒を
体内に入れないためだという説もありますが、
本当のところはよくわかっていません。



ムササビは
カキの実が好き

ヤマビルについて

会員 小林 弘幸

あちこちと山に出かけていると様々な生き物に出会いますが、中には出会いたくないものもあります。それはヤマビル。個人的にはマムシやスズメバチよりもヤマビルの方が恐ろしいかも。シャクトリムシの様に体をよじ登ってきて、いつの間にか吸血しているという、実に不快極まりない生き物です。そしてハンザキ研の辺りには、ヤマビルがめっちゃくちゃ多い！最近でこそハンザキ研に通うために黒川にちょくちょくと来るようになりましたが、過去に何年前だったか黒川周辺の沢沿いの林道を歩いてわけいったことがありました。たしか五月の半ばも過ぎてだいぶ暑くなってきた時期だったと思いますが、林道の途中に湧水で湿ったような場所があり、立ち止まって辺りを見ていると、まわりの地面の上に何やらうごめくものを見つけました。その時は、この地域にヤマビルが多いことは知らなかったのですが、この動きはもしかして？と思い、顔を近づけてよく見ると、案の定、あたり一面ものすごい数のヤマビルが、待ちわびた獲物の到着に歓喜をあげてるかのごとく頭部をブンブンと振り回していました。そして、もの凄いスピードで足元に向かってきたので慌てて後退りしました。ほんの数匹ならともかく、大量にいるとさすがに恐怖すら感じます。それからヤマビルとの格闘がはじまり、足元を次から次へよじ登ってくるヤマビルを、いくら指で弾き飛ばしても、またどこからか登ってきて知らぬ間に体についているので嫌気がさして退散しましたが、自宅に帰ってきてからも手の指に 1 匹ついていました。どこか服の中にも隠れていたのかも知れません。

聞けば昔は、この辺りにはヤマビルもほとんどいなかったということなので、シカの個体数の増加により寄生するヤマビルも生息域を拡大してきたのか、なんにせよ、どうにかならない

ものかと思います。よく一緒に山に出かける後輩がいるのですが、彼の出身が滋賀の信楽焼きの有名なところでして、以前は地元で林業の仕事をしていらしいのですが、そこはまさにヤマビル地獄らしく、山に作業に行く時は長靴にガムテープをぐるぐる巻きにしてヒルが侵入する隙間を無くし、なおかつ塩水に浸したタオルを足元や首に巻き、完璧に防御体制を整えてから行くのですが、それでも体のどこかしらはヒルにやられてるらしいのです。雨上がりの日は特に悲惨で、目の前の木の枝にヤマビルがうごめいてるのが見え、上からも落ちてくるのだそう、話を聞いてるだけでもゾッとしてきます。そんな恐ろしい場所には絶対に行かないと固く決意をしていた私ですが、彼の地元の知り合いが小型のサンショウウオを見たことがあるということなので、固い決意はアッサリと崩れ落ち、探しに行こうということになりました。大量の塩水を用意して、服の隙間という隙間をガムテープでぐるぐる巻きにして覚悟を決めて望んだのですが、その時は不思議とまったくヤマビルはおらず、逆に拍子抜けでした。9月のまだ暑い時期だったけれど、場所がたまたま良かったのかどうか分かりませんが、とにかく助かりました。

今後、ハンザキ研に通う限りヤマビルとの闘いは避けては通れないでしょうが、ビビっていても仕方ありません。対策を考えるか、もしくは開き直って運命に身を任せるしかないでしょう。これからもヤマビルとは長い付き合いになりそうです。



随想

日本ハンザキ研究所と出会った日

会員 松木祥平

私が日本ハンザキ研究所と出会ったのは、3年と少し前になる。兵庫県朝来市の地域おこし協力隊に応募したとき、その存在を知ったのが最初である。

「ハンザキ」がオオサンショウウオの元々の標準和名であることも知らなかった私だが、幼少の頃から生き物が好きだった。高校生の頃は、生物部部長を3年間務めたほどである(3年間、同級生数名しかいない部活だったから)。そんな私であったので、日本ハンザキ研究所に目を惹かれてしまったことは、当然のことである。

3年ほど前の2014年といえば、たしかダイオウイカの注目がまだ高かった時期ではないだろうか。2013年1月に放映されたNHKスペシャル「世界初撮影! 深海の超巨大イカ」は、テレビの前に正座して観た記憶がある。その後、日本海側で海浜に打ち上げられたり、発見されたりするニュースがしばらく続いていたように思う。そう、世間はあのダイオウイカが日本でも見ることができるといふ喜びに湧いていた時だったのである。

そんななか、兵庫県の北部に位置する但馬の朝来市にやってきた私は、ダイオウイカが頭の片隅に残っている状態であった。そこへきて、オオサンショウウオがこの地には生息しているという。最大級の頭足類ダイオウイカと最大の両生類オオサンショウウオの合わせ技である。

大きいことは、すごいことである。

そして、運良く朝来市の地域おこし協力隊に採用された私は、ある日、日本ハンザキ研究所を訪れた。その日は、2014年7月19日である。当日、名著「栃本武良(2014)『飼育係はきょうもフィールドワークへ 水族館屋のユメ・ウツツ物語』北星社」を購入し、その場で栃本先生に日付付きサインまでいただいているので間違いない。日本ハンザキ研究所の何のイベントの

日だったかは覚えていないが、当時、保護されていたハイブリッドオオサンショウウオに餌を与えさせていただいた記憶は鮮明である。

日本ハンザキ研究所は、驚くべきことに、私にとっては大変懐かしい雰囲気を持っていた。旧黒川小学校を改修した施設である日本ハンザキ研究所。そこは、周辺で採取されたという様々な生物の標本やオオサンショウウオをはじめとする物品やポスターが並び、各部屋は教室だった頃の名残を残している。懐かしくて、当然であった。これは懐かしき生物部の部室ではないか。私が高校生の頃に所属していた生物部は、生物実験室に隣接する生物実験準備室であった。また、生物実験は、顧問の谷本先生の意向で、魚類をはじめとする水槽が十いくつか並んでいたのである。それだけではない。栃本先生の深くよくとおる声である。不思議なことに、私の学生の頃の担当教授の小西正捷先生の声にそっくりだったのである。小西先生は、民族学・考古学が専門であるし、年齢は近いが風貌もあまり似ていないから、同一人物ではありえない。しかし、懐かしい思いにとらわれてしまうほどに似ているのであった。その場で、ためらわずに正会員の申し込みをしてしまったのも、仕方がないことだと思う。運命という言葉は好きではないが、これまでの私の人生と日本ハンザキ研究所が繋がった瞬間であったのだ。

そして、元は小学校のプールだったオオサンショウウオ保護センターのオオサンショウウオたちに与える餌。それは、冷凍されたアジやイワシであった。生物部の頃には、水槽の魚たちに冷凍されたアカムシを与えていたので、餌の大小はあるとはいえ、これもまた私にとっては懐かしい感覚だったのである。むしろ、レベルアップ、大人になった感である。まったくもって、幸せな出会いであったと、今でも思う。

その後、私は、日本ハンザキ研究所の事務局員に任命していただくという機会をいただいた。

朝来市の地域おこし協力隊として、最大の 3

年間の任期を務めた現在では、同市内の多々良木という日本ハンザキ研究所からは自動車です 30 分程度の場所に在住し、「田舎暮らし塾」という体験型宿泊施設のリニューアルに取り組んでいる。もちろん、事務局員の活動とともに、オオサンショウウオを広く多くの人に知っていただくことをその事業に含んでいきたいと構想中である。



田舎暮らし塾とワタシ

ピーマン栽培について

会員 竹村正典

今から 5 年前、自分の手で栽培した野菜を消費者に届けたいと思い、その頃作りたかったのがトマトでした。トマトだったら、簡単に出来るからそんなに手間がかからないと安易に考えていたのですが、朝来営農生活センターのセンター長に相談したら、トマトは手間はかかるし資材費がかかるからやめときと言われました。しかしあきらめきれずどうしてもやりたくてどれだけ経費がかかるか調べてみたら、とても多くの経費がかかる事が分かったのでトマト栽培はあきらめました。その時、ピーマン部会がある事を知り栽培にどれだけ経費がかかるか調べてみたら、自分が思っていたより経費がかからない事が分かったので、次の年に作ってみようと思いました。

部会に入る前に、朝来営農生活センター長にピーマン部会に入ってどうやってしたらいいかを聞いてから栽培講習、選別講習などに参加し

て勉強しました。選別センターは、ベルトコンベアでしているので選別も早いです。

最初の収穫を迎えた時どのぐらいで収穫したらいいのかわからなかったのが、担当者に聞いて模型をもらいました。その模型より大きいのを収穫したらいいと分かったらやりやすかったです。出荷前に自分で選別をしないとイケない。選別はカレンダーがあったので、それに照らし合わせてしました。慣れていくとだいたいわかるようになりました。梱包センターでも選別をしてくれるのでどれだけいいピーマンが出来たのかわかります。

10 月には、愛媛県久高原まで視察研修にも参加して来ました。愛媛県では、自動選別しておられました。栽培面積は、14 ヘクタールだそうです。愛媛県では、毎年同じ所で栽培している事もわかりました。朝来市と栽培面積も変わらないしやり方もそうは変わらない事がわかりました。変わっている所は、植える時の気温がピーマンにちょうどと言う事がわかりました。我が家で植える頃は少し気温が低いからピーマン栽培が難しいと言う事もわかりました。今年は、そんなのをふまえてピーマン栽培につとめたいです。



三途の川の地獄の淵でハンザキ調査

理事長 栃本武良

結論としましては、ハンザキを見つけることができなかつたので再びこの世に戻ってきました。昨年の 6 月に一度吐血しましたが、レントゲンやタンの検査、バリウムなどでも異常は見つかりませんでした。その後特に症状もなく放置していたのですが、今年の 1 月 17 日の早朝に 4 回大量の吐血がありました。巻頭言に記したように 14~17 日の大雪で連日の雪かきで体が参ってしまっていたのかと思いました。17 日の午前 5 時に一度、30 分後に 3 回の吐血があつてさすがに雪かきをする元気が出ませんでした。前夜の 21 時ころから何となく胃に違和感があつて吞みすぎたわけでもないのにおかしいなと思つていたのです。当日は高血圧や心筋梗塞の定期検査?のためにデマンドバスを予約していたので 10 時過ぎまで寝転んでいました。バスの時間が近づいたので飼育施設を一回りして下山の用意をしました。4 日続いた雪でバスも電車も大いに遅れて姫路に付いたのは 13 時を過ぎた頃でした。トイレで鏡を見ると顔が真っ黄色で黄疸かとも思つたほどでした。

かかりつけの医院の診察券を見たら、午後は休診となつていたので新鮮なうちの方がいいのではないかと姫路医療センターへ行くことにしました。ここは動物園や美術館、図書館などがあつて歩いて行つていたものですから、何気なく歩き始めたのはいいのですが体が重くて、途中の郵便局で一服して倍の 40 分くらいかかつて到着したものの、ここも受付時間が過ぎていました。受付で事情を話すとびっくりしてすぐにドクターを探してくれることになつたのです。その間、救急車でやつてきたときの病室で横になつていたのですが、カーテン一枚隔てたお隣ではご臨終との声が聞こえてきました。次はこちらの番かと思つていたのですが、若いドクターが駆けつけてきて早速胃カメラということに

なりました。若いインターンの先生が少々興奮気味にすごい写真が撮れましたよと・・・実は、腹部静脈瘤破裂でまさに血液が噴射されているものでした。主治医のドクターからはなんで救急車で来なかつたのか?本当に一人で 3 時間もかけてやつてきたのかと数回尋ねられました。これは救急車の事案ですよとのことでしたが、自分が救急車に乗るなんてことは全く思いもつかなかつたことです。少々体がだるいくらいにしか考へていなかったのです。救急車といえば急病や事故、火災や事件などでのサイレンを鳴らして走ることくらいにしか思つていなかったものでした。

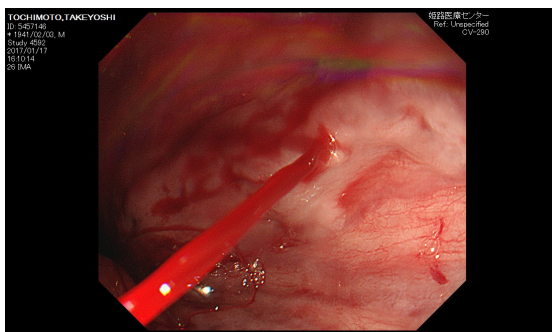
かくして、76 歳にしてはじめての入院生活をしなくてはならなくなりました。翌日の施術のために絶食、そして静脈瘤の結索(瘤を縛つて出血を止める)ということになりました。アルコールのために肝臓機能がだめになって(肝硬変)行き場のなくなつた静脈血が瘤を作つたり体表近くに血管を浮き上がらせたりということだそうです。肝臓がんになっていないだけましかなとのドクターは「命を捨てるかアルコールを捨てるか」との明言を吐かれました。まだ終活を始めたばかりですので、あと数年は生かしてほしいと思つますということで断酒することになりました。数日後に手が震えませんかという質問を受けましたが、僕は、アル中ではなくただひたすらにビールを愛しただけなので禁断症状は出てきませんでした。それにしても、吐血したときに喉を固形物がころころと出ていく感触があつていったい何なのかと思つました。8 時間ほどの出血で胃の中にたまつた血液がゼリーを作つていたのでした。これが喉に詰まつて窒息死したり出血多量でショック死することがあるのでそうです。まあ、悪運が強かつたのかもしれないが、肝臓の機能は復旧しないとのことですのでいつ破裂するのか爆弾を抱える身となりました。

退院前に食生活について栄養士の先生からレクチャーを受けましたが、塩分ダメ、刺激物(わさび、辛子、七味、胡椒、タバスコもってのほかど釘を刺されました)もダメ、この 5~6 年間ビールで副食物を流し込んでいたのですから食生活の改善は大変です。食事の用意の時間もかかりますし片づけも大変です。もともと、一日 3 食のメインがビールでは年間 1 トンほどの量になりますし、晩酌だといいいながら焼酎やウイスキーといったアルコール燃料で頑張ってきたのですが、一生の間に飲む量が終わったということでしょう。

食生活を変えてから、体調の方は快調でやはりかなりのダメージがあったのだということを実感しています。この 1~2 年は朝起きるのが苦痛だったり、昼間も体が何となくだるい、少し肉体作業をするとすぐに顎が出てしまうという状況でした。しかし、基本的には体力が落ちていて若い時のように体を動かすことは無理が出てきたようです。

ドクターからは、施術後の様子を見るためと瘤を固める手術をするので 2~3 週間の再入院が必要と言われました。ということで 2 月に 2 度目の入院となりました。予定日に 4 人の大部屋が満室なので個室に同じ料金で一晩過ごすことになりました。風呂、炊事場、トイレ付きの大きな部屋でした。病院の一番西端の部屋だったのですが、その西の壁に窓がついていました。西日が当たって夏は困るのではないかと思ったら、なんとブラインドを上げると姫路城が額縁にすっぽりと収まったように見えるのでした。夜間照明も美しいもので、翌日の部屋替えの時にこの部屋のままでいいんですけどと言ったらそうはいきません、次の入室予約が入っているとのことでした。大部屋は入れ代わり立ち代わり色々な病人が入り出します。夜だけでなく日中もいびきや寝言、さらにはナースコールも頻繁で賑やかなことでした。若いナースの皆さんは使命感あふれる眼差しではありましたが大変

な仕事だなど改めて思われました。採血や点滴などで刺針の際にはアルコールに対してアレルギーはありませんかと毎回念を押されました。皮膚の方は強いのですが、内臓の方はだめですと答えて呆れられました。申し訳ありませんでした。



食道下部 静脈瘤からの噴血



特等の個室にて



術後の流動食は、おもゆ 100 とプロッカゼリー他 2 日目より 3 分粥の濃湯食になりました。日々ランクアップしていくのです。

イベント報告

生野 銀谷祭り

- ①年月日 平成 28 年 9 月 25 日(土)
- ②時間 10:00~15:00
- ③天気 晴
- ④場所 生野町 3 区 天理教庭内
- ⑤展示内容 ハイブリッドオオサンショウウオ
実物展示&オオサンショウウオ生態パネル展示
- ⑥スタッフ 7名

今年の銀谷祭りは、「銀の馬車道、鉱石の道」への日本遺産登録再チャレンジに向けて、地元への盛り上がりを実現するためにルートにあたる各市町村から B 級グルメ参加や遺産登録に関する展示が行われたり、数多くの、のぼり旗も会場を盛り上げました。あいにくの急変する荒れ模様の天候の中でも、来場者 2 万人を上回る活況でした。

ハンザキ研究所の実物展示は毎回盛況です。しかし、例年、生態パネルブースは閑散としています。そこで今回は、展示ブースの配置を変えて生態パネルへの導線を広くとり、入場しやすい環境を造りましたところ、多くの見学者がブースを訪れました。



第 13 回日本オオサンショウウオの会 (邑南大会)

- 日時 平成 28 年 10 月 1・2 日
- 場所 島根県邑智郡邑南町
邑南町健康センター「元気館」
- 事務局参加者 7名
- 研究発表者 岡田 純 「鳥取県日南町におけるハンザケスロープのモニタリング調査その 2」

今回のオオサンショウウオの会総会に於いて、役員改選が行われました。日本オオサンショウウオの会事務局として栃本事務局長が 2 期 4 年間の任期を終えました。今後は、事務局長として清水善吉 (三重自然誌の会) さん、事務局員として村田満さん、田口勇輝 (安佐動物公園) さんが後任として引き継がれます。

邑南町は、エコミュージアム施設「瑞穂ハンザケ自然館」に於いて、町内の川に生息するオオサンショウウオの生態観察などができるユニークな対応を始め、地域の特色ある動植物の展示をしています。この施設は、室内水槽によるオオサンショウウオの産卵孵化に連続して成功している唯一の国内事例を持ち、大会参加者には大変興味深い会場の一つです。

大会当日の夜間観察会に於いても、一か所で 10 数匹のオオサンショウウオが確認されるなど生息環境の良好さが維持されていることが伺え、自然観察には最適な場所と言えそうです。



第 3 回オオサンショウウオ夜間観察会

年月日 平成 28 年 10 月 15 日(土)
 場所 日本ハンザキ研究所と市川支流長野川
 時間 19:00～
 講師 岡田 純 副理事長
 スタッフ 9 名
 参加者 33 名
 捕獲個体 1 匹(再補)

観察場所は、ハンザキ研究所から徒歩 5～6 分の市川支流長野川。川沿いのガードレール上からのぞき込める大変観察しやすい場所です。当日の観察場所には大小 3 匹のオオサンショウウオが浅い川の岩盤の中央に 3ヶ所のポイントに出ていました。しかし、参加者が移動をする間に巣穴へ戻ってしまい、その姿を観察することはできませんでした。通常、夜間のオオサンショウウオは、餌の待ち伏せ体制に入ると容易に動くことはありません。しかし、今回は、数分の間移動をしてしまいました。自然観察会の難しさです!!



兵庫県環境エコフェスティバル

年月日 11 月 12 日・13 日
 場所 但馬ドーム
 時間 12 日 10:00～16:00
 13 日 10:00～15:00
 事務局参加者：12 日 5 名 13 日 8 名
 展示内容：オオサンショウウオ生態パネル
 ・交雑種オオサンショウウオ実物展示
 集客数 8 万 2 千人(2 日間)

但馬感動市と同時開催されるエコフェスティバルですが、季節柄か近年は冷雨の中での開催で見学者、スタッフ共に大変なイベントとなっていました。今年は地元イベントスタッフもびっくりの小春日和で最高の幕開けとなりました。ハンザキ研究所は、2 年続きで但馬ドームの中での展示となり天候の影響は受けません。スタッフも、栃本理事長に代わり、岡田副理事長と子息の龍河君が初参加して、水槽の掃除(結露)のお手伝いをしてくれました。



事務局長 奥藤 修

編集後記

今年の4月はいつもと違っていました。生野銀山（「シルバー生野」）で4月16日（毎年4月15日に近い日曜日）に晴天の中、「へいくろう祭」が行われたのですが、なんと会場周辺を彩る“へいくろう花”（ヒカゲツツジ）と“ソメイヨシノ”それに“枝垂れ桜”が揃ってほぼ満開状態で見ることができたのです。こんなことは17回を数える開催で初めてのことだったそうです。

「あんこう」18号は予定通り（？）定期総会に間に合わせてできました。これも寄稿して下さる執筆者の方々のお陰です。春は何かと行事や予定が多い時期ですので本当に感謝申し上げます。



中央手前は桜。

桜の左手、山裾に見えるのが“へいくろう花”（ヒカゲツツジ：あでやかさはなく目立ちにくい花ですが、朝来市指定天然記念物でここほどの群生は全国でも珍しいらしい）

編集長 増子 善昭



平成 29 年 3 月 31 日 発行

特定非営利活動法人

日本ハンザキ研究所

〒679-3341

兵庫県朝来市生野町黒川 292

TEL・FAX 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

HP: <http://www.hanzaki.net>

